

野球害毒論争研究

——新聞社間による部数獲得競争の視点から——

玉置 通夫

Study of the “Baseball Canker Controversy (1911)”

—— from the perspective of competition between newspapers ——

TAMAKI Michio

Abstract: This paper presents a study of the “Baseball Canker Controversy” of 1911. This was the first controversy concerning student baseball in Japan and was taken up at length by 17 Tokyo-based newspapers. Newspapers at the time, the end of Meiji era, consisted of 4 or 6 pages and contained political, financial, social and literary columns: independent sports columns did not exist at the time and sports news was inserted into social columns. Their intensive treatment of the controversy was therefore very unusual and, furthermore, had a great bearing on each newspaper’s circulation.

1. メディアとスポーツ

日本で、明治時代以降の近代メディアに初めて登場したスポーツは、大相撲だった。1881（明治14）年5月14日、東京日日新聞（以下日日、新聞は省略）に掲載された「相撲天覧の記」がスポーツ記事の嚆矢となるもので、1段25字で83行の力作だ。内容は、5月9日に島津邸で行われた天覧相撲の模様で、横綱境川の土俵入り、30番に及ぶ取り組み評の後、明治天皇の要望によりぶつかり稽古を披露したことまでが描写されている。83（明治16）年になると、朝日にも相撲記事が登場し、各紙とも相撲を積極的に取材するようになる。また、その他のスポーツでは、83年6月4日の日日に前日の3日、東京・隅田川で行なわれた「海軍レガッタ」の模様を伝える記事が目新しい。記事は、わずかに30行（1行は20字）で、勿論写真はない。賑やかな応援の様子が描写されており、明治20年代になると、大相撲に旧制高等学校の野球が各紙の紙面を賑わすようになる。

さらに、明治30年代に入ると、野球熱が早稲田や慶應などの私立大学を始め、中等学校にも広がり、新

聞紙面に盛んに取り上げられるようになる。そんな中、東京の新聞各紙を舞台に起こった“事件”が、野球害毒論争だった。1911（明治44）年8月29日から始まった朝日の「野球と其害毒」（以下害毒論）というキャンペーン記事が引き金となり、9月下旬までの約1ヶ月にわたって繰り広げられた「野球をめぐる論争」は、まさにメディアがスポーツを大々的に取り上げた初の出来事だったといえよう。

2. 野球害毒論争

この野球害毒論争は、いくつかの注目点がある。それを列挙してみると、次のようになる。

- ①舞台は東京、大阪の読者は全く読むことができなかった。
- ②朝日に対して前面对決を積極的に仕掛けたのは、毎日と読売。
- ③朝日の記事には事実誤認や一方的記述が多く、拙速と思ひ込みが突出。
- ④朝日の指摘にも、一部正当性があった。
- ⑤朝日、日日、読売の部数競争に影響があった。

以上の各問題点について、具体的に論証してみたい。

まず、①だが、大阪朝日(現朝日新聞大阪本社)には、記事が一切掲載されていない。ただ、「東京紙面で掲載中」との宣伝広告は計2回掲載されており、大阪本社に申し込めば購読することは出来た。しかし、よっぽど関心のある人や俎上に乗せられている学校、学生の関係者以外には、大阪在住で購読する人は見当たらなかっただろう。具体的な購読者数の記述は社史にもなく不明だが、まず、そう断言して間違いないものと思われる。このため、朝日と同様、大阪から東京へ進出した大阪毎日も、東京日日の題字で発行していた東京紙面だけで、大阪紙面では全く扱っていない。読売は東京の地域新聞であったため、大阪では購読できなかった。

そこで、疑問がわく。なぜ、大阪朝日は「野球と其害毒」を掲載しなかったのか。この点に関して、社史には記述がない。このため、あえて傍証となるような事象を探してみると、当時の東京と大阪の対立、もっと具体的にみると、この害毒論を仕掛けた東京社会部の渋川玄耳部長に対するアレルギーのようなものがあつたのではないか。渋川部長は「東京社会部こそが新聞社の中心」が持論で、政治や経済といった本来の社会部の守備範囲ではない分野に対しても積極的に取材させ、記事化した。このため、政治部や経済部との軋轢が絶えず、またプライバシーをも考慮しない徹底的で強引な取材指揮には社内外からの批判も多く、その「勇名」は大阪本社にも届いていた。元来、どの社であっても、東西対立はあるもので¹⁾、とくに個性が強い大阪発祥の新聞社にとっては、かなり大きな問題であった。現在でも、記事の扱いなど紙面制作上の対立構造は解消していない。あくまでも類推の域を出ないが、新聞社の基本的な対立構造から考えると、渋川アレルギーは本質の一端を突いているのかもしれない。

しかし、結果論的に言えば、大阪紙面で害毒論を扱わなかったことで、4年後に中等学校野球の全国大会(現夏の高校野球)を開催する際に救われたことだけは確かだろう。もし、大阪紙面でも扱っていたら、とても開催は覚束なかったと類推される。「散々野球の悪口を言っていた舌の根も乾かぬうちに」との批判を浴びるのは必定だからだ。実際、大阪紙面では扱っていないにも関わらず、同様の謗りを受け続けたのも事実だ²⁾。それほど、この害毒論は、強い印象を与えたといえる。

3. 各紙の対応

当時、東京には38社ほどの新聞社が内務省に登録されているが、実際に新聞を定期的に発行していたのは17社にすぎなかった。このうち、害毒論に関わつたのは13紙だが、内容は積極派と消極派に2分できる。複数回の企画記事を掲載したのは6紙あり、残る7紙は1回程度の論説やコラムのほか、投書、野球講演会の予告、講演会記事を数回掲載してお茶を濁している³⁾。しかし、現在のような運動面などはなく⁴⁾、スポーツ記事が事件や事故などとともに社会面に同居していたことを考えれば、条件の悪いなかで、これだけ多くの新聞がスポーツを論じたことは画期的で、スポーツジャーナリズム史に特筆される「事件」だったことを証明しているといっても過言ではない。

さらに、各紙の立場を分析すると、朝日を無条件に支持する論調は見当たらない。朝日のように、学生が野球をやること自体を問題視するのではなく、大部分は、学生と野球、教育とスポーツの視点から、野球をやることには理解を示している。つまり、朝日の主張する野球の害毒は認めつつ、それ以上に野球の利点などを強調する言説が目立つ。「野球は面白いスポーツだから、熱中しすぎて各種の弊害を生む。過熱しないように指導するのが教育者の責務」といった意見が多く、なかには、野球の利害を離れて教育問題に傾斜してしまう言説もある。いずれにしても、当時の学校教育の現場で、人気スポーツとなった野球への対応が大きな問題になっていることを示している。

積極派6紙は、仕掛けた朝日の22回を除けば、日日23回を筆頭に読売16回、中外商業11回、国民6回、海国日報3回の企画記事を掲載している。このうち、異彩を放っているのは、中外商業だ。「野球界春秋戦国」のタイトルで、特に自らの立場を鮮明にせず、各紙の記事内容を論評する紙面批判、評論家的なスタイルをとっている。また、国民は「野球の利害」と題し、大隈重信(早稲田大学総長)、鎌田栄吉(慶應義塾大学塾長)らの談話を集め、反朝日の姿勢を鮮明にしている。海国日報は、害毒論争を導火線にして、目的意識なき学生気質に矛先をむけているのが特徴的だ。

4. 朝日、日日、読売の関係

積極的に関わつた朝日、東京日日、読売3紙の状況

について説明すると、大阪から東京に進出したのは、朝日と毎日。ともに全国紙としての態勢を整えつつあり、朝日は東京朝日（通称東朝）、毎日は東京日日（通称日日）の題字で発行していた。

この2紙は、大阪で激しい部数獲得競争を展開していた。毎日の前身である大阪日報は1876（明治9）年に創刊され、大阪朝日は3年後に発刊した。その後、大毎、大朝の名称で人気を2分し、東京への進出は、朝日が早く、1888（明治21）年。一方、大毎は18年遅れの1906（同39）年ようやく東京へ出て、11（同44）年3月、東京の最古参紙である東京日日を買収し、東京でも朝日との部数競争を繰り広げていた。そんなところで発生したのが野球害毒論争で、日日は、朝日の害毒論が始まった3日後から「学生と野球」のタイトルをつけて連載を開始した。「野球擁護」の主張を掲げる投稿が主体で、徹底的に対立したのも、両紙の関係から考えると当然だった。いわば、害毒論争は、大阪で展開中の「大朝 VS 大毎」の代理戦争だったとみるのが妥当だろう。論争分析には欠かせない視点である。

一方、読売は、この2紙とは異なり、1874（同7）年東京で発刊された。当時は東京周辺だけを購読範囲とした地域紙で、小説などの文芸物を中心とした紙面が特色だった。このため、事件のような社会面ネタには消極的な傾向があり、販売戦略に乏しい「文芸紙」と揶揄されることも多く、部数も2、3万部程度で他紙との部数獲得競争には、大きく遅れをとっていた。この害毒論争では、野球擁護の立場から著名な教育者、学者が談話形式で見解を発表する「問題となれる野球」を計16回連載しているものの、談話主の言説も比較的淡白なうえ、前半と後半は連日掲載でないため、東京日日の企画記事「学生と野球」に比べて迫力不足、印象の薄さは否定できない。しかし、ほとんどが擁護派である弁士を集めた講演会を開き、内容を紙面で完全収録した手法は見事で、東京生え抜きの各紙のなかでは存在感を示したといえる。ちなみに、読売は大正末期から昭和にかけて、ラジオ面の創設や米大リーグチームの招請で飛躍的に部数を伸ばしたが、朝日や毎日のような全国紙態勢になるのは、戦後の52（昭和27）年に大阪へ進出してからである。

5. 「野球と其害毒」の問題点

それでは、論争の火付け役となった朝日の「野球と其害毒」について考えてみよう。このキャンペーンに

入る前に、朝日は2つの前奏的な記事を掲載している。まず、前年の明治43年11月25日に「野球の興行化」と題し、学生のクラブ活動でありながら、観客から試合の入場料を徴収していることに絞った問題提起を行なっている。しかし、この記事は1回だけで、掲載の意図は不明だが、おそらく、早稲田や慶應の試合に入場料を取っているとの情報を基に書いたのは間違いない。さらに、同44年8月20日から「野球界の諸問題」のタイトルで4回の記事連載に踏み切っている。内容は、早稲田と慶應を槍玉にあげ、「米国遠征の間、全く授業を欠席しているが、単位は取れるのか」、「入場料の使途が不明朗。選手が料理屋などで遊興する費用に当てているのではないのか」といった疑問点を提示している。

この2つの前奏的文章のうち、とくに後者の「野球界の諸問題」は、当時の読者が抱きやすい疑問を記事にしており、裏付ける資料こそないものの、それなりの反響があったのではないかと推察できる。そこで、意を強くして、徹底的に問題点を追求する性癖が顕著な渋川社会部長⁹が、勝負に出たのは自然な成り行きだった。しかし、「野球と其害毒」は、功を焦りすぎた感じが強い。「兎に角やれ」と部員に発破をかけての長期連載だが、内容的には拙速でかなり問題点も多い。

その第一は、事実誤認が目立つことだ。22回の企画は、最終回のアンケート調査分析を除き、談話と投稿形式。延べ36人が意見を開陳しているが、このうち22人が談話によって登場している。つまり、談話中心であるのが、このキャンペーン企画の特色だ。これは、この種の企画記事では異例である。しかし、談話を掲載した人たちは「教育に関係ある先達の公平なる意見」と初回の前文で明記しているにもかかわらず、野球は害毒との立場がほとんどで、公平な人選とはとても思えない。しかも、談話には信憑性が乏しかったり、明らかに事実誤認ではないかと思われる部分が散見される。談話の内容を確かめたり、本人に問い合わせたような感じがせず、本人の言ったことをそのまま載せているのは明白である。事前の確認作業が行われていないならば、現在ならば、まず掲載不能である。ジャーナリズムとしての基本を逸脱しているといわざるを得ない。

具体的に指摘すると、2回目に登場した東京府立一中（現東京都立日比谷高）の川田正激校長は、「野球選手が実際出来ぬと云ふ今一つの証拠は慶應の神吉と云ふ選手です。彼の選手は選手として私が知ってから

既に十年になる。毎年落第して居ると思はれる」と断言している。ところが、日日紙上で野球擁護派の作家、押川春浪から「氏は慶應幼稚舎よりの純慶應出身にして選手として約十年間其名を知られたるは彼が運動家として優秀なりしが為のみ、学業に於ても常に中位以上を占め(以下略)」と反論される有様で、結局、川田校長は全文の取り消しを朝日に申し出ている。この取り消し文は「川田氏の談中神吉選手に関する分は相違の点ある由川田氏より申越ありたるを以て川田氏の談としては全部之を取消す」とあり、間違えた川田氏が悪いといったニュアンスが感じられ、現代ではとても考えられない文言だ。また、「知名の選手の性行経歴に関しては別に本社に於て詳細に調べあるを以て他日掲載の機会あるべし」とも記し、事態を深刻に受け止めている様子が伺える。しかし、不確実な談話を掲載したという事実は残るわけで、朝日の責任が軽減されたことにはならない。

第二は、談話の都合の良い部分だけを取り出して脚色している点だ。この問題は現在でも談話記事の中で指摘されることが多く、ジャーナリズムにとっては永年の課題といっても良いだろう。害毒論では、「舊選手の懺悔」とのタイトルで登場した早稲田大学講師・河野安通志氏の談話が問題視された。河野氏は、かつて早稲田大学野球部の主将をつとめ、当時は母校の講師をしながら野球部の面倒もみていた。球界全体にも広く顔が売れており、代表的な人物だった。その河野氏が紙上で発した談話は、自らの立場を全否定する強烈なものだった。

つまり、河野氏は、「後悔している」と大見出しの文中、「早稲田なぞへ入らずに高等商業へでも入ったならば、と時々思はぬでもない」、「獅子内君⁶は自分でも云って居るが全く早稲田の野球の為に犠牲になった人」と言い切り、「選手を買収す」の見出しでは、「(野球を学校が広告に遣うとの指摘に対し)如何にも明治は私も非度いと思つて居る早稲田の第二選手の投手であった山下などは明治へ買収されて行った形迹がある」と語った。もし、この発言内容が本当ならば、河野氏は相当な覚悟をしなければならないはずだ。講師は辞さなければならないし、大学野球部とも完全に縁を切つてしまわなければならないだろう。その後の人生を変えるぐらいの衝撃的な発言で、朝日の紙面をみた野球部長の安倍磯雄教授が河野氏のもとに駆けつけ、真意を質したのも当然の動きだった。それくらい、インパクトのある談話だったのだ。

あわてた河野氏は、すぐに反撃した。まず、日日に

「小生が記者に対して云いたる事と相違し居る」として、「野球に対する余の意見」のタイトルで投稿した。内容は、朝日の記者が「早稲田なぞに入らず高等商業に入ったならば今頃はもっと幸福でしたらうね」と言ったので、「人間の幸不幸は六ヶ敷(注難しい)問題で或は御説の通りかもしれん。思ひやうによってはさう思へぬでもないが」と返答したが、都合の良い部分だけを取り出して脚色されたと強調している。まさに業界で「引っ掛ける」と称する手法を使ったわけで、河野は嵌められたことになる。

6. 「学生と野球」、 「問題となれる野球」の問題点

それでは、反朝日の急先鋒だった日日と読売の記事には、問題点がないのだろうか。ともに野球擁護の立場を鮮明にしており、とくに日日は、朝日の記事の矛盾点を突く攻め方は的を射ていただけに面白く、読者の共感を得た。作家の押川春浪が慶応大・神吉選手への誤解を指摘した部分では、朝日も全文取り消しをせざるを得なかったし、早稲田大・河野講師に対する朝日の取材態度などを難詰して、朝日紙上に河野の反論を掲載させた。しかし、問題点探しが一段落すると、押川の論調も、枝葉末節に拘った揚げ足取り、難癖付けが多くなり、その筆鋒が感情論に傾斜するようになる。このため、最後は説得力を欠いたきらいがあり、「聶頂の引き倒し」と他紙に酷評されるありさま⁷で、ただ反対のための反対に収斂されてしまった。

読売の連載は、日日に次ぐ16回に及んだものの、前半と後半に休載が重なり、盛り上がりには欠けたきらいがある。嘉納治五郎(東京高等師範学校長)、三土忠造(代議士)といった異色の人材を起用したり、「野球は普及しない」との意見も掲載しているものの、日日のような記事量もなく迫力が感じられない。反対に、講演会の詳報は、ほとんどが一方向的な朝日糾弾のうえ、歯切れの良い言説ばかりとあって、面白かった。しかし、講演者の内容は大同小異のため、一気に大量の反害毒論を読まされた読者は、辟易したに違いない。記事が多ければよいというものではないからだ。

7. 部数などへの影響

ではいったい、この害毒論争は、各紙、とりわけ朝日、毎日、読売の部数にどんな影響を与えたのだろうか

か。明治末期から大正にかけての発行部数をみてみると、害毒論争の流れを反映していることが鮮明に分かる⁸⁾。11（明治44）年の東京における元日部数は、朝日12万余に対し、日日は7万6千余、読売は3万余⁹⁾。読売は低迷期だったこともあり、12年以降もそれほどの伸びは見られず、害毒論争の恩恵に浴したとは、とてもいえる状況ではなかった。しかし、日日は社説も動員した徹底的な反朝日キャンペーンが、見事に功を奏した形だ。12（同45）年は朝日の12万5千余に対し、10万3千余と2万余まで迫った。13（大正2）年には約1万まで差を縮め、ついに13（同3）年には約2千の差で朝日を追い越した。

こうしてみると、やはり害毒論争は朝日にとって大きな傷跡を残したといえるだろう。とくに朝日にとって痛手だったのは、日日紙上で健筆を振るった押川春浪ら野球擁護派が読売とは別個の演説会を開き、朝日の不買運動を仕掛けたり、広告を出稿しないように企業へ働きかける決議をしたことだ。実際に、どのような働きかけがなされたのかは資料や証言も残っておらず不明だが、当時、朝日は1面を全面広告にする大胆なページ取りが売り物だっただけに、広告の質の劣化は直接経営に響く重大事であり、この広告不掲載を呼びかける攻勢は相当応えたようだ。朝日の社史（朝日新聞百年史・明治編）は「（押川ら野球擁護派は）朝日の競争紙である東日（東京日日）の紙上をかりて反撃し、（中略）演説会をひらいて『東朝不買』『広告不掲載』を決議した。問題が深刻化したので、東朝も（中略）二十二回で打ち切り、ようやく妥協がなった」と総括しており、「妥協がなった」との表現に、苦境を逃れるために収拾策を模索したことを窺がわせている。具体的なやり取りなどは不明だが、朝日は深刻に受け止め、とりあえず企画の掲載を終了することにしたものと考えてよいだろう。

さらに、朝日社内では、東西本社間の対立が顕著になった。害毒論を仕掛けた東朝社会部長・渋川玄耳に対する大朝側のアレルギーは拡幅され、今後ギクシャクした関係が続くことになる。害毒論の紙面掲載に与しなかった大朝は、4年後、大毎との部数競争を意識し、時期尚早とみられていた中等学校野球の全国大会開催に踏み込んだ。全くの賭けだったが、回を重ねるたびに観客が増え、夏の高校野球として定着する「当たり事業」となり、当初は非協力的だった東朝¹⁰⁾も巻き込んで社内融和の原動力になったのは、皮肉な展開

と言うべきだろう。

一方、害毒論争で野球擁護派の牙城となって部数増に結びつけた日日＝大毎は、中等学校野球への関心を持ちながらも、主催していた中等学校のテニス大会が盛況だったこともあって、野球大会開催には様子見を決め込んだ。しかし、近畿勢の相次ぐ優勝もあって大会人気は沸騰し、大毎には焦りが生じた。このため、20（大正9）年、「球界の正常化」をスローガンに慶応大や明治大などで活躍した選手を入社させ、大毎野球団を結成して各地で試合を行った¹¹⁾。さらに、24（同13）年に選抜中等学校野球大会を開催して、中等球界に参入した。朝日より遅れること9年、このような野球を介したライバル争いは、複雑な始原の糸を手繰って行けば、明治末年の害毒論争が源流となっていることを、如実に物語っている。

注

- 1) 新聞紙面は、発刊地域によって大きく異なる。大阪紙面で一面トップ記事が東京では一行ものっていない現象もあるほどだ。
- 2) 1914（大正3）年に中等学校野球の三高大会への支援要請に対し、大阪朝日新聞の村山龍平社長は即座にこたわっているが、その理由は害毒論だとみられている。
- 3) 各紙の掲載一覧は、別紙資料①参照。
- 4) 運動面が登場するのは、各紙が増ページ態勢となる昭和に入ってから。朝日、毎日が1931（昭和6）年に創設し、読売は29年に運動欄を新設。
- 5) 1908（明治41）年6月15日、作家の川上眉山が自殺した際、朝日は、短い通信社の記事でお茶を濁し、大きく報じる他紙に遅れを取った。このため、渋川は川上の家計を徹底的に洗い、預金通帳まで入手して調べた。この手法は、顰蹙を買った。
- 6) 早大出身で京浜電鉄社員、獅子内謹一郎。
- 7) 9月24日読売の「問題となれる野球」第十六（最終回＝筆者注）中、内務書記官・潮恵之助の言。
- 8) 別紙資料②参照。
- 9) 当時は、元日の発行部数を内務省に届けることが義務づけられていた。部数は、朝日＝朝日新聞百年史・明治編、日日＝毎日の3世紀に依ったが、読売新聞発展史には明治32年から大正12年までの読売の部数が省略されており、読売の部数は推定数。
- 10) 第1回中等学校優勝野球大会（現夏の大会）の開催社告は、東京紙面に掲載されず、試合内容も短くおざなりだった。
- 11) プロ野球がなかった当時、最強のチームといわれ、米国遠征の際にはホワイトハウスにも招かれ、大統領と記念写真を写すほどの歓迎ぶりだった。

資料① 〈各紙掲載一覧〉

	朝日	東京日日	読売	都	やまと	時事新報	日本	万朝報	ニ六新報	国民	報知	中央	海国日報	中外商業
11月25日	記事													
8月20日	企画1													
21日	企画2													
22日	企画3													
23日	企画4													
29日	企画1													
30日	企画2		コラム		広告			広告						
31日	企画3													
9月1日	企画4	企画1												
2日	企画5	企画2	記事											
3日	企画6	企画3	企画1											
4日	企画7	企画4												
5日	企画8	企画5	企画2											
6日	企画9	企画6								企画1				
7日	企画10	企画7	企画3	社説	社説		投書			企画2				企画1
8日	企画11	企画8	企画4							企画3			企画1	企画2
9日	企画12	企画9	企画5							企画4			企画2	企画3
10日	企画13	企画10	企画6					社説		企画5			企画3	企画4
11日	企画14	企画11	社告							企画6				企画5
12日	企画15	企画12	企画7											企画6
13日	企画16	企画13	企画8								コラム			企画7
14日	企画17	企画14	企画9											企画8
15日	企画18	企画15	企画10											企画9
16日	企画19	※企画16	企画11					社説						企画10
17日	企画20	※企画17	企画12			記事	記事	記事						企画11
18日	企画21													コラム
19日	企画22	企画18												
20日		企画19	記事											
21日		企画20	企画13											
22日		企画21	企画14					記事		談話記事		記事		
23日		企画22	企画15		記事			記事	短信					
24日		企画23	企画16							短信		社説		

※名称としての新聞は省略。11月25日は明治43年、以後は明治44年。

※〈朝日企画〉「野球の興行化」(11月25日)▽「野球界の諸問題」(8月20日-23日)▽「野球と其害毒」(8月29日から22回)〈東京日日企画〉「学生と野球」(9月1日から23回)〈読売企画〉「問題となれる野球」(9月3日から16回)〈国民企画〉「野球の利害」(9月6日から6回)〈海国企画〉「現代学生論」(9月8日から3回)〈中外企画〉「野球界春秋戦国」(9月7日から11回)

※東京日日の16、17両日は社説と企画「野球が与ふる偉大な教訓」上下も掲載

※読売の8日はコラムもあり、10日は社告も。20日の記事は主催演説会詳報(8ページ)

資料② 〈朝日と毎日の部数〉

	〈明治43年〉		〈明治44年〉		〈明治45年〉		〈大正2年〉		〈大正3年〉	
	朝日	毎日	朝日	毎日	朝日	毎日	朝日	毎日	朝日	毎日
東京	111292	96161	120422	76398	125630	103186	134394	124321	148495	150014
大阪	166100	166684	182900	269260	190800	293497	198700	307130	241800	321454
合計	277392	262845	303322	345658	336430	386683	333094	431451	396295	471468

※部数は元日調査したもの。明治44年の毎日・東京のみ
東京日日との合併のため3月1日調査の数字。出典は両社史。